

つねまつ すがた

常松菅田遺跡の発掘調査



指物腰掛

腰掛こしかけは一本の木から作り出す刳物くりものと材を組み合わせた指物さしものとがあり、いずれも弥生時代から見られます。

今回出土した腰掛は、古墳時代前期（今から約一七〇〇年前）の指物腰掛で、今までよく知られている、座板に脚を差し込む組み方とは異なり、脚に座板を差し込む組み方です。このような組み合わせ方、また完全な形で見つかる例は大変珍しく、部材の組み合わせ技術を知る上で貴重な資料です。

この指物腰掛に座った人物は、どのような人だったのでしょうか？ムラのえらい人でしょうか？それとも・・・



管玉作り

弥生時代中期のアクセサリー（管玉）作りに関連する石器資料が、三〇〇点以上まとまって見つかりました。

管玉くだたまの材料となる碧玉へきぎよくは、当時広く流通していた北陸産とみられます。この碧玉を、板チョコにあるような溝を入れて打ち割り、形をととのえながら小さくし、最後に孔をあけて磨き、管玉に仕上げていました。

今回の調査では、管玉作りに関連する資料として、一ミリ程度の破片（チップ）から三センチ程度の破片、また石の針などが見つかりました。しかし、肝心の管玉自体は見つかっていません。完成した管玉は、どこかへ持ち出されたのでしょうか？



溝の入った碧玉片



先端のアップ

管玉作りの資料が集中する範囲を慎重に調査したところ、管玉に孔をあけるために使われた石の針、石針が計八点見つかりました。完形品でも一センチに満たない石針は、主に安山岩で作られ、先端に使われた痕が観察できます。また、ほとんどが壊れていることから、孔開けに用いられた後、捨てられたと考えられます。

